

あとがき

今回の論文集が、実際に企画として動き始めたのは、二〇一二年夏ごろのことである。東北福祉大学の長谷川雄一教授が、編者の一人である伊藤を彩流社の竹内淳夫社長に紹介してくださったことが、大きな契機であった。このとき伊藤が、かねてより抱いていた「選り抜き^ぬの研究者们^たちが、本気で探究したいと考えるテーマについて、持てる力を尽して追い求めた成果を、水準を超えた専門書として出版してみたい。そしてその過程を、彼らとともに心ゆくまで愉^{たの}しみたい」という、手前勝手ともとれるような「願望」を訴えたところ、竹内社長は、最大限の好意をもってこれを受けとめ、その刊行を快く引き受けてくださった。この英断がなければ、本書が世に出ることはなかったであろう。また長谷川教授には、共編者として萩原が加わるさいに、あらためて仲介の労を取っていただくなど、さまざまなご助力をいただいた。本書がこのように日の目を見たのは、竹内社長のご厚意と、長谷川教授のご指導によるところが大きい。たとえて言うとおふたりの設^{しつ}えられた舞台のうえで、編者も含めた執筆者は心ゆくまで「踊り」を楽しむことができた。おふたりには最大限の感謝をささげたい。

ともあれ同年の秋から、編者二人で執筆者の人選を開始した。いわゆる『〇〇先生退職記念論文集』の類^{たぐい}とは異り、だれに寄稿を依頼するかは完全にわれわれの自由であったが、そこで重視したのは、つぎの三点である。ひとつめは「企画の趣旨に賛同し『歴史を学ぶ愉しみ』を共有してくれる人」。ふたつめは「その『持てる力を尽した探究の成果』を読んでみたいと、われわれに思わせてくれる人」。三つめは「全力でこのプロジェクトに取り組んでくれる人」である。伊藤はおもに関東圏の政治外交史やメディア史の方面に、萩原は関西圏の思想史の方面に「土地勘」があり、優れた研究者も数多く知っている。しかし、中堅以上の一流の研究者の多くは、まさにその優秀さゆえに、すでに膨^{ぼう}大な仕事を抱えており、右の三つめの条件には合致しないであろう。また博士号を取得した直後の、将来を嘱望される若手の

研究者は、博士論文を単著とするのに忙しく、やはり三番目の条件に当てはまらない。そこでわれわれは①自分たちと同年代で、②博士論文を単著として最近出版したか、または近い時期に出版することがほぼ確実に、これから新しい研究テーマに着手しようとしていると思われる、そして何よりも③周りから「実力派」と高く評価されている研究者、をリストアップして、ひとりひとりに打診していった。なかには、それまで両編者と一面識もなかったにもかかわらず、電話でいきなり寄稿を依頼した人もいる。しかし、打診を受けた六名はこころよく勧誘に応じ、二〇一三年五月には、本書刊行のための共同研究プロジェクト「近代日本対外認識研究会」を組織するに至った。

われわれ八名は、関東と関西、四国に分かれて住んでおり、頻繁に研究会を開くことは難しい。そこで半年に一度、二日間の日程で「中間報告会」を開き、そこに全員が参加、報告して、集中的に討議する方式を採用した。春と秋に開かれる報告会は、それぞれ十数時間にも及び、かつ議論が白熱したため、しばしば、余裕をみて確保したはずの会議室の予約を、さらに延長しなければならなかった。確か二〇一四年六月に東京で開かれた第二回報告会だったが、二日目の日程を終えたあと、伊藤自身、気力が尽きて、しばらく席から立ちあがれなかった記憶がある。萩原もまた、中間報告会が終わったあと、疲労感を抱えて帰路に就いたことを鮮明に覚えている。しかし、執筆者全員が力を尽して水準の高い報告を行い、質疑や討論にも積極的に参加した。そして寄せられる批判にも真摯に耳を傾け、みずからの論考に反映していった。中間研究会での「真剣勝負」は、確実にひとりひとりの研究の水準を大きく向上させ、その成果である、本書の質を高めることにもつながっている。二年目からは科研費の補助もいただき、それにより心ゆくまで愉しく、実りの多い「探究と思索の時間」を過ごせたことも、非常にありがたいことであった。

こうして本書『近代日本の対外認識Ⅰ』は完成した。まさに選り抜きの研究者たちが、本気で探究したいと考えるテーマについて、持てる力を尽して追い求めた成果を、このように専門書として出版することができたのである。諸々の事情により、昨秋に始まった『近代日本の対外認識Ⅱ』刊行プロジェクト(本書二三頁参照)には、六名全員に参加していただくことはできなかったものの、いつの日か、同じメンバーで新たな仕事をやってみたい。そのような

「新たな願望」を、編者二人は抱きはじめているところである。

編集を担当して下さった彩流社の高梨治さんには、本当にお世話になった。心より感謝申し上げたい。締切り間際になって、伊藤がいきなり「ここまでできたら、思う存分に筆を揮いたし、他の執筆者にも揮わせたい」と言い出し、当初の約束を大幅に上回る原稿枚数を要求したにも拘らず、ただちに認めてくださった。おかげで多くの執筆者が、本書のなかで十分に、その意を尽すことができた。また最終原稿の提出後、いよいよ編集作業に入るという段になって、ふたたび伊藤が「常軌を逸した提案」を立て続けに繰り返したときも、「そうお考えになるのなら」と、できうる限りの対応を下された。かりに本書に、体裁のうえで「不備と思われる点」があるとすれば、それは編者が「常軌を逸した提案」を押し通した結果であって、高梨さんの落ち度ではないことを、彼の名誉のために明記しておきたい。

企画が本格的に始動してからの二年間、編者の二人、そして執筆者の多くが「歴史を学ぶ喜び」を堪能しつくした。その過程のすえに生みだされた本書を読まれたみなさんに、同じような喜びを少しでも感じていただけたのであれば、文字どおり「この上のない幸せ」である。

二〇一五年四月 編者記す